

## ロシアの北朝鮮政策

兵頭慎治（防衛研究所）

### 1．中国のアプローチと温度差

北朝鮮に対するロシアの基本姿勢は、中国と同様に北朝鮮の立場を擁護するというものであったが、最近では変化の兆しが見受けられる。その背景の 1 つには、韓国との経済や資源分野での実利的な協力が進展して、ロシアの外交政策における韓国の位置付けが大きく上昇していることがある。しかし、それ以上に、アジア地域においてロシアが戦略的に重視する中国との関係が変化し、ロシアの中国離れの動きが北朝鮮問題をめぐる中露間の政治的なスタンスの違いに表れているのではないかと考える。

ロシアは度重なる核実験とミサイル発射に懸念を深めており、国連の場においても、中国と比較して、北朝鮮に対して批判的な姿勢を強めている。例えば、2010 年 3 月 26 日に発生した韓国哨戒艦沈没事件の際には、朝鮮半島における緊張の高まりを懸念してロシアは独自の調査団を派遣したほか、ラヴロフ外相は同年 12 月 13 日に訪露した北朝鮮の朴宜春外相に対して、韓国への砲撃事件、新たなウラン濃縮施設、核・ミサイル開発の停止を求める国連安保理決議違反を非難した。ロシアが外相会談という公的な場で北朝鮮を直接非難するのは珍しく、北朝鮮に対するロシアの基本姿勢が変化しつつあるのではないかと予感させる出来事となった。

さらに、北朝鮮が事実上の長距離弾道ミサイルを発射した 2012 年 12 月 12 日には、ロシア外務省は、ミサイル発射は国連決議を通じた国際社会の総意を無視した許しがたい行為であり、北東アジアの安定に悪影響を与え、地域の多国間経済協力を困難にさせるとして遺憾の意を表明した。国連安全保障理事会常任理事国でもあるロシアは、これまでも安保理緊急会合の開催を要請して、北朝鮮に端を発する朝鮮半島の緊張緩和を求める動きも見せるなど、国連の場においても朝鮮半島に対する中国のアプローチと温度差が見られるようになっている。

### 2．9 年ぶりの露朝首脳会談

こうした中、2011 年に両国が急接近する動きがみられた。まず、2011 年 5 月にフラトコフ対外情報庁長官が平壤で金正日総書記（当時）と会談して外国情勢について意見交換

を行ったほか、6月にはロシアの政府系天然ガス企業ガスプロムのミレル社長が北朝鮮の金英才駐日大使とモスクワで会談し、北朝鮮を經由してロシアと韓国を結ぶ天然ガス・パイプライン敷設問題について協議した。さらに、8月24日には、金正日総書記（当時）が専用列車で訪露し、東シベリアのウランウデ近郊の軍事施設で、メドヴェージェフ大統領との間で露朝首脳会談が実施された。プーチンが大統領に就任した2000年から2002年までの間は毎年首脳会談が行われていたが、その後、首脳の相互訪問は中断されていたため、実に9年ぶりの首脳会談復活となった。

首脳会談においては、政治問題に関して、金正日総書記（当時）は六者会合に前提条件をつけずに復帰すると改めて表明するとともに、問題解決に向けてミサイルと核兵器の実験と生産を凍結する用意があると発言した。さらに、経済協力では、ロシアから北朝鮮を經由して韓国に至る天然ガス・パイプラインの建設構想を実現させることで一致し、両国のガス会社で共同委員会を作り、韓国のガス会社とも協議しながら具体化を進めることで合意した。また、首脳会談とほぼ同時期にロシア軍のシデンコ東部軍管区司令官が平壤入りして、2012年からの捜索・救助訓練の再開に合意するなど、露朝間の軍事協力を復活させる動きがみられた。さらに、北朝鮮の対露累積債務は計約110億ドル（約8,450億円）にまで膨らんでいるが、2012年9月に「旧ソ連期に提供された借款により北朝鮮が露に負った債務の調整に関する協定」が署名され、ロシアはその負債を9割減免し、残る1割を北朝鮮での共同事業（資源、保健、教育）に充てることで最終的に合意された。

こうした露朝接近の動きは、中国への依存度を低下させたいとする北朝鮮がロシアにアプローチし、独自の朝鮮半島政策を模索するロシアがそれに呼応したものと考えられ、その背景には中国要因が存在する。2011年12月17日に金正日総書記（当時）が死亡して、三男の金正恩による後継体制に移行しつつあるため、2012年の露朝関係は足踏み状態にあるものの、対中国という観点からして、広範囲の分野において露朝が関係を復活させる構図には大きな変化は見られないであろう。

### 3. 独自の北朝鮮政策の模索

朝鮮半島に対するロシアの基本政策は、「朝鮮半島の非核化、安定化」である。但し、朝鮮半島の非核化に関しては、北朝鮮の核はロシアに向けられたものでないとの認識から、ロシアの安全保障にとって直接的な脅威ではないと考えている。それでも、核を含む大量破壊兵器の拡散や核によるテロリズムはロシアにとっても大きな脅威である。特に、北朝

鮮を經由してイスラム過激勢力などのテロリストに核開発技術が流出することをロシアは恐れており、この点において米露間には利害の共有が見られる。北朝鮮がミサイル発射を繰り返すにつれ、北朝鮮に対するロシアの反応はより否定的となり、日米と歩調を合わせる動きも顕著となりつつある。北朝鮮に対するロシアと中国との対応には温度差が見られつつあり、ロシアの対応は限りなく日米に近づきつつある。

多極世界が既に到来しつつあるとの戦略環境認識から、中国との戦略的連携に対するロシアの政治姿勢が低下しており、この意味において、ロシアはこれまでのように中国との戦略的連携を一義的に追求するという路線から、より自立した東アジア外交を模索し始めていると言える。戦略面におけるロシアの中国離れは、中露協調という観点から北朝鮮問題において中露が足並みを揃えるというモチベーションが低下し、中国からより自立した東アジア外交をロシア自身が模索する余地を与えていると言えよう。

以上から、東アジアのリージョナルな国際関係を切り取って考えた場合、東アジアにおけるロシアの立ち位置、とりわけ中国との関係において、微妙な変化が生じていると観察され、その影響がロシアの朝鮮半島政策にも表れつつあると結論付けられる。ロシアの朝鮮半島政策を観察する場合には、中露関係も視野に入れる形で、俯瞰した視点が求められるであろう。

(2012年12月27日記)